

発行責任者

※佐藤温重・※梅田誠

※加納永一

※横浜市南区浦舟町 横浜市大・医学部

※※京都市東山区山科御陵 京都薬大

昭和49年7月25日発行

★ 第38回研究会要項決まる

別紙(色頁)の如くに研究会が開催されることになった。

★ 幹事会及び総会議事録

6月2日信州大学において幹事会が開かれ下記の案件について討論が行われた。各案件は引き続き行われた総会にはかられいづれも承認可決された。

なお、幹事会出席者は野瀬、久米川、三宅、増地、佐藤、堀川の各幹事、黒木、乾、加納の各前幹事、山田会計担当、梅田会員通信担当に永田世話人であった。

① ビブリオグラフィーは黒木、乾両氏に、49年度から51年度迄の三年間編集の労をとって頂く。

② 次回(49年度秋期)研究会は、下の要領によって開催する。

世話人：「城西歯科大学 久米川正好

会期：昭和49年11月29～30日

場所：東大医科研、講堂

シンポジウムのテーマ：「細胞から組織へ——ガラス器内での組織器管形成をめざして」  
オーソライザーを、東大薬学部遠藤浩良にお願いする。

③ 次々回研究会は下記のごとくに開催する。

世話人：金沢大学薬学部 堀川正克

④ 新旧幹事の交代を下記の通り行う。

新幹事(49及び50年度)

東部：北大理 吉田 勉 弘

東大医 野瀬 清

西部：岡大医 増地 広

阪大微研 佐藤 弘 毅

旧幹事(47及び48年度)

東部：黒木、乾

西部：五島、加納

なお新幹事選挙の次点は下記の通り。

東部：東京医科歯科大 須田 立雄

北里大医 蔵本 博行

西部： 阪大徹研 五十嵐 章  
愛知ガンセンター 江村 牧人

(以上敬称略)

- ⑤ 「名誉会員の制度を作ってはどうか、又作るならば、どのような規程にするか、等について幹事会で検討してみてもどうか。」と言う提案があった。「これについて小委員会の如きものを設けて検討しては如何」との意見がだされた。
- ⑥ 「各種培養細胞株、殊に日本で樹立された株の保存供給を円滑にするため、地域毎に、培養株センター(仮称)を設置する事を肝要と考え、大学等から設立準備に関する申請を関係省庁へ行くときに、本学会からも要望書を添えてはどうか」との意見が出された。
- ⑦ 会員名簿の作成を49年度に行い、これを学会センターに依頼する。
- ⑧ 入会希望者及び退会希望者の審査をし、別項の新入会員を承認した。
- ⑨ 事務局を東大薬学部山田正篤教授の所へ移す。
- ⑩ 48年度会計報告(別項参照)。

なお、会計年度を本年度は4月から12月迄とするが、以後毎年度1月から12月迄とする。

※ 昭和48年度会計報告

前年度よりの繰越金	497,549	
48年度 収 入	719,484	
48年度 支 出		911,115
次年度への繰越金		305,918
合 計	1,217,033	1,217,033

内 訳：

収 入		支 出	
正 会 員 費	221,000	各種刊行費	
賛 助 会 員 費	365,000	ビブリオグラフィ <sup>71</sup>	345,750
文 部 省 刊 行 補 助 金	130,000	<sup>72</sup>	366,300
銀 行 利 息	3,484	会 員 通 信	
		昭和18-21	47,480
		研 究 会 補 助 金	
		昭和36,37	100,000
		幹 事 選 挙 費	22,800
		事 務 事	28,785
小 計	719,484		911,115
前年度からの繰越金	497,549	次年度への繰越金	305,918
総 計	1,217,033	総 計	1,217,033

(会計幹事 山田)

☆ 49年6月 新入会会員名簿

研究機関	同住所・電話	氏名	専門分野
札幌医科大学 放射線医学教室	060 札幌市中央区南1条 西16丁目 011-(611)-2111	小祝 聰一郎	放射線生物学
独協医科大学 第1病理学教室	321-02 栃木県下都賀郡 壬生町北小林 02828-(6)-1111 (内線 2180)	角屋 晃 英	細胞遺伝学
北里大学薬学部 生物薬品製造学 教室	108 東京都港区白金5- 9-1 03-(444)-6161	西郡 秀 夫 戸部 敏	内分泌学・生化学・ ウイルス学 ウイルス学
日本獣医畜産大学 獣医学部家畜衛 生学教室	180 武蔵野市境南町1- 7-1 0422-(31)-4151	内藤 恭 久	家畜衛生学
東京医科大学 産婦人科学教室	160 東京都新宿区西新宿 6-7-1 03-(342)-6111	清川 尚 宮下 忠 雄	産婦人科学 "
東京大学理学部 動物学教室	113 東京都文京区本郷 7-3-1	鳴海 燭 子	内分泌学
第一製薬株式会社 研究所, 安全性 研究部	132 東京都江戸川区南舟 堀町2810 03-(680)-0151	永井 栄 一	生化学・毒性学
日水製薬株式会社 研究部	340 草加市稻荷町1805 0489-(24)-1631	坂本 好 史	遺伝生化学
岡山大学医学部 第二病理学教室	700 岡山市鹿田町2- 5-1 0862-(23)-7151 (内線 709)	元井 信	病理学
癌源研究施設 病理部門	"(内線 747) "(内線 748)	藤宗 俊 明 矢部 玉 江 宮野 忠 子 常盤 孝 義	組織培養 " " "
川崎医科大学 実験病理学教室	701-01 倉敷市松島577	木本 哲 夫	実験病理学

外国会員

Orthopedic Research  
Laboratory, College  
of Physicians &  
Surgeons of Columbia  
University.

630 West 168th  
Street, New York,  
N.Y. 10032,  
U.S.A.

Harshad Chokshi

生化学

★ 49年4月 入会賛助会員

日本専売公社 〒257  
中央研究所 神奈川県秦野市名古木23  
(生物実験センター)

★ 住 所 変 更

難波正義 〒701-01 倉敷市松島577  
川崎医科大学実験病理学教室  
TEL(0864)62-1111 内線5026  
安村美博 〒321-02 栃木県下都賀郡壬生町北小林880番地  
独協医科大学微生物学教室  
TEL(02828)6-1111  
古川利温 同上  
独協医科大学小児科学教室  
三宅清雄 京都第一赤十字病院, 検査科

★ 海 外 留 学

角永武夫 (1年の予定)  
Bldg 37, Rm 3D 20,  
Chemistry Branch, N.C.I., N.I.H., Bethesda, Md.,  
20014, U.S.A.

★ 第37回研究会を終わつて

永田哲士 (信州大・医・解剖)

1974年6月1日(土), 2日(日)の両日, 信州大学医学部基礎講義室において, 第37回研究会が開催されました。会場に予定しておりました新基礎講義室の完成が予定より遅れ, 5月により早く使用可能となりまして, 無事学会を開くことができました。演題も公募により一般演題が15題, シンポジウム演題9題と合計24題集まり, 第1日を一般演題と懇親会, 第2日をシンポジウムと幹事会および総会として2日間で終了するようにプログラムを作りました。会期中に組織培養関係の業者に商品展示を依頼し, 会員の便宜をはかりました。一般講演は内容により培養技術・細胞培養・細胞周期・薬剤・感染・核酸蛋白合成・器官培養の7つのセッションに分けましたが, 無理に分類しましたので, 演者の一部の方々には場違いの所に入れられた御不満もあるかと思いますがお許し下さい。シンポジウムは組織培養におけるラジオオートグラフィの応用というテーマで, 松沢大樹東北大教授に司会をお願いし, 私が一部お助けして, 企画および進行をはかりました。前半では技術的な問題を取り上げ, 後半では応用として加齢と発癌の問題にしばりました。自画自賛ではありませんが, 松沢先生の名司会により活発な討論があり, 成功であったような印象を受けました。

演題募集と同時に会員通信により研究会の出席の申込書を会員にお送りしましたが, 返信が

少なく、350通の会員通信に対し約50通の御返事を戴き、内訳は出席者40名、欠席者10名でした。また非会員から問い合わせと出席申込を前もって戴いた方が26名あり、事前に出席の判明していた方々は66名でしたが、学会当日出席された未登録会員が37名、未登録非会員が78名あり、合計181名の出席者となりました。今後、研究会の開催通知を会員通信を利用することになりましたので、会員各位から、研究会出席申込書を出欠を明記して世話人に返送するよう御協力していただければ、集会者数の見込みがあらかじめ予想でき、世話人にとっては都合がよいと思います。

会期中は幸い晴天に恵まれ、初夏の信州を楽しんでいただくこともできたようです。御参会されました会員各位の御協力を感謝いたし筆を置きます。

### ★ Stanford 大学にて — Dr. Eaton のこと —

難波正義（川崎医大-病理）

Stanford 大学を訪れたことのある人は、樹木の生い茂るキャンパスと、その中に点在する赤い屋根の石造りのスペイン風の美しい校舎とを思い出されるであろう。そして、その校舎をめぐる石畳になった回廊を歩くと、スペインかメキシコあたりの、古い寺院を訪れているような錯覚に陥る。一方、10年ほど前に建てられた医学部は、近代的な瀟洒なもので、しかも東洋的な感じが溢れている。私自身、医学部の建物に始めて近ずいたとき、東洋のどこかに帰ったような錯覚に囚われた。

Stanford 大学は、校内に校舎を新築するとき、その時代の最高の設計と材料とで建てる方針をとっているとのことで、上に述べた校内のいろいろの建物は、一見の価値がある。それに比べて、解剖と私の働いていた Medical Microbiology との2部門の入っている建物は—医学部の各部門の中で、この2部門のみ Medical center の外にある—はたして、当代一の設計のもとに建てられたものであろうか？それはやゝ疑わしい。生い茂る樹木にとり囲まれて、低いかまぼこ型の2階建ての私どもの建物は、なんの情緒もなく、ぶすつとして、一直線に100米ほど延びている。その建物の壁の所々には、蔭がまつわり屋根まで伸び上がっている。このずんぐりした建物は、見るからに頑丈そうな感じを受ける。事実その通りで、例のサンフランシスコ大地震のときも、校内のこの建物だけは、びくともしなかったとのことである。

この Medical Microbiology のあたりは、近くに Stanford 家の墓所があるせいか、大学の中でも特に樹々が多いところで、この建物の西側の小道を森の中に入ると、やがてその墓所に着く。

ある土曜日の朝、私が研究室に出掛けると、Medical Microbiology の駐車場で、見なれぬ大型のやゝ使い古した乗用車が停まっていた。平生でも、上に述べた環境のせいで静かな駐車場なのに、その日はまた特別静かな感じのする日だった。その車の後ろのパンパーに貼られたステッカーから、大学の助教授以上の人の車と分かる。私は、一体これは誰れの車なのだろうと考えた。私の働いている部門の助教授以上の人の車は全部記憶していたが、その車だけは、誰れのものか見当がつかなかった。そして、医学部の別の研究部門の人のものかも知れないと一

瞬思った。しかし、もし外からの客だとすれば、Medical Microbiology の人の車があってもいいのではないか。その日は土曜日で、しかも、まだ朝9時頃で、その車以外の車は見当たらなかった。

私は、その車の持ち主のことに深い関心を持ちながら、そして少し警戒しながら、研究室の入口の鍵をあけ、人気のない建物に入った。建物に入ると、2階から階下に下りてくる人の足音が聞こえ、やがて、廊下で動物小舎に行く、Dr. Eatonに出会った。私は、まだ、そのとき、さっき見かけた車がEatonのものであるとは分らなかった。Eatonの家は、医学部から2、3マイル離れたところにあり、しかもその家は、私の家と同じ方角だったので、毎朝8時半ごろ私が車で大学に行っていると、歩いて大学に向っているEatonをよく見かけた。毎日、歩いているEatonをいつも見ていたので、車を運転するEatonを私は予想できなかった。

Dr. Eatonは70才をすぎているであろうか。原発性異型肺炎をおこすEaton agentを発見した人である(1944)。現在、医学部の名誉教授で、学生の授業などはやってなかったが、自分でGrantを持っていて、2、3人の技術員を使って腫瘍免疫、特に膜に関係した仕事を、かく録として続けていた。毎週火曜日午前9時からの研究室全体のセミナーにも毎回出席していたし、自らも、私の滞在中の2年間に、自分のデータで数回セミナーをやった。

Eatonが歩いて大学に行っている側を、私はよく通りすぎるので、あるとき、ある研究員にEatonを車に乗せるべきかどうか訊ねたところ、その研究員は、ある人が通勤途上で、歩いているEatonを見かけ、Eatonに車を申し出たら、Eatonの気嫌が悪くなったという話をしてくれた。私は、この話を聞いて以来、気楽にEatonの側を走れるようになった。

そのうち、私も動物を使う仕事を始め、毎日、動物を観察しなければならなくなった。土曜日だったか、日曜日だったか、とにかくある休日の朝も、例の車は停まっていた。私は、動物小舎に行く途中、Eatonに出会った。朝の挨拶のあとで、彼は喉の奥のほうでもぐもぐと、“お前は培養ばかりやっているのではないのか。いつからお前も動物を使うようになったのだ。”と真面目とも冗談ともつかぬことを云いながら、通り過ぎて行った。

たぶん、Eatonは、休日には、脚の方だけ off duty にしているのであろう。あるいは教会に行くために、急いでいるのかも知れない。

## ✧ 培養株センター設立について

佐藤二郎 (岡山大・医・病研・病理)

近年組織培養を利用する研究が多くなり、それと共に新しい培養法や特殊な機能をもった新細胞株が急速に樹立されつゝあります。これらの細胞株はその性状を明かにされると同時に、我が国における貴重な実験材料として保存維持されねばならないと考えます。具体的には①第37回培養研究会総会で御同意いただきましたように地方別に培養株センターを設立することが必要です。②その準備の一つとして我が国で樹立された株細胞の調査を近く行いたいと思いますので御協力方お願いいたします。

## ☆ 講演会のお知らせ

Leonard Hayflick, Ph.D.

Professor,

Department of Medical Microbiology,

Stanford University School of Medicine.

Diploid cell line, mycoplasmaなどの研究で名高いProf. L. Hayflickがこの9月に来日され、国内各所でセミナーを開催なさいます。時間、場所など未決定のところはカッコ内に記名してある世話人に御照会下さい。

- (1) 9月9日 (月) P.M. 3:00~5:00 (国立予研 第一会議室)  
(多ヶ谷 勇, 奥村 秀夫)

演題: Use of human diploid cell strains in human virus vaccines.

- (2) 9月10日 (火) P.M. 2:00~3:00 (東大医科研・講堂)  
(勝田 甫)

演題: \* Human aging at the cellular level.

(以後のセミナーは大抵\*これと同じ演題になると思います。)

- (3) 9月12日 (木) (京大医学部) (翠川 修)  
(4) 9月17日 (火) (奈良県立医大) (螺良 義彦)  
(5) 9月19日 (木) (川崎医大) (木本 哲夫, 難波 正義)  
(6) 9月21日 (土) (九大医学部) (高木 良三郎)  
(7) 9月24日 (火) (三菱生命研) (加藤 淑裕)

## ★ 米国組織培養学会

### —近況と活動—

沖垣 達 (Pasadena Foundation for Medical Research)

はじめに

このたび、担当幹事の方から親しい連絡があり、米国組織培養学会 (Tissue Culture Association, 以下TCAと略す) の近況を報告せよという依頼を頂いた。長い歴史と伝統を持ち、現在に至っても世界をリードしつづけているこの学会を紹介するには私のほかに適当な方がおられると信じているが、指名を受けたことでもあり、また過去10年間の会員として、同時に現運営委員としての経験から知っている事実を記して報告に変えたいと思う。

最近組織培養関係で米国に留学される方が多く、また米国の研究者が日本の研究機関を訪ずれることもしばしばあるから、TCAについてと、とくに米国における組織培養に関連した研究課題については有形無形の情報が入ることと思う。従って学会訪問記形式の紹介をする要

はないと信じている。次に要求されることは、本年度のTCA全国大会（第25回大会は去る6月3日～6日の間Miami Beachで開かれた）における討論内容を近況としてお知らせすることであろう。所が不幸にして、いくつかの理由で私はこの大会にでることができなかった。私自身の発表も協同研究者に依頼して賁をはたしたことであった。このような訳で、依頼者の希望をあるいは裏切るかもしれないが、今年度学会の報告をすることは不可能にある。しかし講演要旨は、学会機関誌In Vitro 1974年第9巻第5号に要約されているので、これを参考にされたい。

以上のようなことから少しく道を変え、TCAの事業活動のうちで、表面に出ないもの、あるいは、日本の学会では今までに例をみないものなどについて拾いあげて述べ、「学会」のあり方について考えてみたいと思う。

TCAは少くとも米国内の生物医学関係学会のうちでも、特異な立場にあり、独特の活動を続けていると信じている。とくにその巾広い事業内容は、いわゆる「研究発表および討論の場」としての学会の範囲を飛び出たものがある。

初めにおことわりしたいことは、以下述べることのある部分は、筆者が邦文で報告しているものと少しく、重複することである。既刊の各関連誌関係者の御了承を頂きたいと思う。

#### その歴史

一般的に言つて学会という研究団体は、興味あるいは目的を同じくする者たちの討論の場であるといつてよいだろう。この点において、洋の東西における差は少ない。結果として発表の場としての集会の運営方法にもあまり差がない。TCAの全国大会においても、いくつかのトピックをあげてシンポジウムがあり、分科会があり、その上に一般講演があつて、形式的には日本組織培養学会のそれと何ら変らない。

けれども、それぞれの学会は、異つた先輩達によつて創設され、異つた道を歩んで来ている。この点において各学会には独自の進み方があり、少しづつ異つた姿がある。TCAの現状をみてみると、やはりそこには他の学会には見られない空気があり、それは学会創設以来のものであることが判る。

TCAの発足は、1946年にさかのぼる。残されている記録によると、故G. O. Gey博士が故C. M. Pomerat博士に送つた書簡が基になっている。Gey博士は、「解剖学会での研究報告をみると、組織培養法を用いて興味ある研究がなされている。ここでまとまつた型式の組織培養研究会を創つてはどうか」と述べて文中にPorterやWhiteの名をあげている。実はこの前年に同様の提案が学術会議に相当する諮問機関でとりつづされている事実がある。これについては亡くなられる寸前の恩師Pomerat先生が直接私たちに語つてくれたことを今も思い出す。実際に発足した当初の学会は、Tissue Culture Commissionを称され、同年11月に初の集会が持たれている。この会の使命は、(1) 培養技術の開発、改良、必要度調査および、(2) Bibliographyの出版の二点にせられた。初期の数年度は解剖学会と共催で研究集会を

開き、1949年にT C Aと名乗った。この頃には、学会が運営する研究室が全米対癌協会の援助のもとにSloankettering Institute 内にもうけられ、ここでの研究成果がやがてDi fco 社からの市販製品として世に出ることになったのである。一方、M. R. Murray女史の指導のもとに、1952年にBibliograpy の第1巻が出版されているが、このかけには女史の献身的な努力とLederly, Eli Lily 両社の援助があることを記さなければいけない。1946年の第1回集会には、わずかに33名の出席者があつたのみだったが、この中から3人のノーベル賞受賞者が出ており、ほかにも忘れることの出来ない先輩がキラ星の如く連らなっている。

またT C Aの当初からのアイディアであつた技術講習会は1948年に16名の学生を対象として始められ、以来毎年所を変えて実に17年の長きにわたって続けられた。いくつかの事情で1964年に中断するまでに、この学会はどれほどの後進を自分たちの手で作り続けてきたか、測り知れないものがある。この事実は、T C Aが独自の研究所を持つべきであるという固い考えの基を作り、それは後に述べるように、現実には具体化したのである。こうして見るとT C Aは研究の場としてのみならず、常に新しい技術の改良を試み、集団の意志として後進を育てるという特殊な学会であつたことに気がつくのである。

### その構成

T C Aの現会長は最近N I Hを退職されたV. J. Evans女史である。昨年12月にはN I HでEvans女史の功績をたたえた特別のシンポジウムが開かれたが、これについては筆者はすでに報告してあるのでここではふれない。現在の通常会員者はほぼ2000名で年に一度所を変えて全国大会が開かれる。全国大会は例外なく例年6月上旬に行われるが、明年はMontreal 明後年はPhiladelphia、1977年はNew Orleansとすでに確定している。

全国大会のほか三地方部会があり、私たちの属するCalifornia Branchは200名の会員を持ち年2回集まることにしている。ほかにも全国にまたがって、無脊椎動物部会、植物部会それに名ヨ会員のFell女史の名を冠したHonor B. Fell部会があつて独自の集会を開くことがある。T C Aの1973年度の収入は11万ドルを上まわっており、赤字がないので、財政上まことに健全な学会と言わなければいけない。会員になる為の資格審査は比較的簡単で、学生や技術者を歓迎する。1973年には280名の入会志望者のうち265名が会員になっている。

### 各種委員会

T C A全国大会は例年3日間位の予定で計画されるが、いづれの日も夕食後から夜半までの時間も会議に利用される。そのうちのいづれかの時間は、Technical DiscussionとかRound Tableと呼ばれる型式で数多くのグループにわかれて自由討論が行われる。本年のプログラムからそのいくつかを拾ってみると、培養液をいかに選択すべきか、血清と混濁、合成培地、培養機器などというセッションがある。いわば各部門での専門家あるいは経験者が、苦労話を語り、改良法を述べて新人や学生を育てるという型式になっている。これらの討論は学会ごとに

構成されるのではなく、常任委員会の恒例の任務であり、いわば委員会の一年間の継続調査研究の成果でもある。委員会名をそのままあげると、Chemically defined media, Contamination, Human Values, Materials and Supplies, Sera, Terminology, Student Affairs などがある。もちろんこの他に、行政、財務対外、出版などの委員会があって、総会の折に年度末報告があるが、培養技術を中心とした実務委員会の任務に重点をおいている学会型式は好ましいものであろう。また別個に、W. R. Earle Award 委員会は、全国大会の研究発表者から、博士号を持たない者の、あるいは研究テーマの責任者でない者を一つのグループと考へて、この中でもっともすぐれた報告に賞を与えている。多くの場合は、若い技術者が受賞者となり、ここにも T C Aらしい伝統が繋がれている。この他にも、いくつかの委員会があって活発な活動を続けているが、次の項と関連するので、後述することにしてしよう。(以下次号)

#### 参考文献

1. 沖垣 達：アメリカ組織培養学会と、The W. Alton Jones Cell Sciencel Center, 採集と育, 34:14-18, 1972,
2. 沖垣 達：米国細胞生物学会ならびに国際細胞学会連合設立委員会に出席して、細胞生物学シンポジウム, 24:239-242, 1973,
3. 沖垣 達：米国NIHにおける組織培養シンポジウムに参加して、メディア・サークル, 19:69-76, 1974

#### ✪ 編集後記

会員通信夏号をお届けする。本号の末尾の色頁には、次回研究会演題募集と、ビブリオグラフィ原稿募集要項が掲載されている。多数応募されることを期待したい。

本号編集終了後に沖垣さんから長文の米国組織培養学会の紹介記事をいただいたので追加掲載した。次号にわたるこの記事は本会の運営を考える上で興味あるものであると思う。

近頃、培養法を応用した毒性学的研究のデータがジャーナリズムにとりあげられることかしばしばであるが細胞レベルでの毒性と個体レベルでの毒性との関連について、正当な判断をす指針を与えてゆくことは会員の義務ではないかと思う。

次号原稿は11月15日締切り予定である。会員各位の投稿を切望する次第である。(S)

## 日本組織培養学会 第38回研究会のご案内

日本組織培養学会 第38回研究会を下記のとおり開催いたしますのでご案内申し上げます。

1. 会 期： 昭和49年11月29日(金) 30日(土)
2. 会 場： 東京大学医科学研究所，講堂（1階），東京都港区白金台
3. 日程予定： 11月29日(金) 午前 一般演題  
午後 一般演題  
懇 親 会  
11月30日(土) 午前 一般演題  
総 会  
午後 シンポジウム
4. シンポジウム：  
「細胞から組織へーガラス器内での組織・器官形成をめざして」  
司会者 遠藤浩良（東京大学薬学部）（詳細は別紙を参照のこと）
5. 一般演題申し込み締切り：  
昭和49年9月10日(火) 必着
6. 演題申し込み要領
  - (1) 申し込み： 下記申し込み用紙にご記入の上，書留でお申し込み下さい。
  - (2) 講演時間： 講演・追加討論 30～40分
  - (3) 抄 録： 演題申し込み者には折り返し抄録用原稿用紙をお送り致します。抄録原稿を9月30日(月)までにお送り下さい。
7. 集 会 費： 会員，学生500円，非会員800円
8. 懇 親 会： 会場でビーアパーティーを計画しております。 会費1000円
9. 申し込み書送り先：  
〒350-02  
埼玉県入間郡坂戸町多和田  
城西歯科大学 口腔解剖学第一講座 久米川 正 好  
☎ 0492-85-5511 内線342
10. そ の 他： プロジェクター（35mm）は2台使用の予定です。（16mm映写機ご使用の方はあらかじめご連絡下さい。）

シンポジウム 「細胞から組織へ—— ガラス器  
内での組織・器官形成をめざし  
て——」

近年の急速な分子生物学の進歩は、細胞の分裂、増殖というすべての生命に共通する基本的機構から、その機構の特殊化された表現である細胞の分化にまで至る生命現象の実体的理解に明るい希望を与えている。この領域で細胞培養の貢献が特に多大であることは論をまたない。しかし、生命現象のこの種の理解は、たしかに実体的ではあるが、一方まだ概念的な段階にあることもたしかである。

すなわち、生体内では、形態的機能的に特殊化した分化細胞は特定の規則的配列をとって一つの組織を形成し、それらはまた一定の組合わせによって一つの器官を形成する。これらはさらに集って系を構成し、さらにそれらは統合されて個体を完成する。したがって我々は、このように生命の基本的最小単位である細胞が、分裂増殖という基本的機構の上のりながらどのようにしてきわめて規則的な集団をつくり、その集団は組合わさって形態的にも機能的にも特定の構築をとるに至るかを実体的に理解し説明できなければならない。これによって生命現象の概念的理解から生体反応の具体的理解へ至る道が開かれる。

このような観点に立って細胞培養から組織培養、器官培養への道程を整理し、生物学の基本的命題に迫る *in vitro* 実験手法としての組織培養の一つの方向を探ってみようというのが本シンポジウムの趣旨である。

まず、均質な細胞集団である長期継代培養細胞においても分化機能が見事に維持されていることや、均質な単離未分化細胞の *in vitro* 分化が単一な生理活性物質によって誘導されることなどの例示から、細胞分化の発現ないし維持と組織形成能との関連を考察する。さらに、異質細胞集団が共存する各種の培養での形態と機能の観察から組織・器官形成における異種細胞間の協働の問題について論議する。続いて、植物および動物細胞の培養における最近のトピックス〔Nude mouse (遺伝的胸腺欠損マウス)へ移植したヒト培養癌細胞の組織再構成など〕から現在の培養技術と培養細胞の問題点を考え、最後にこれらを総括して、生命現象、生体反応の本質的理解をめざす組織培養法の将来を展望してみたいと考えている。

会員諸兄姉の活発な御意見を9月30日(月)までに企画責任者まで寄せられるよう期待します。

企画責任者

東大・薬・生理化学 遠藤 浩 良

〒(03)812-2111 内線6678

城西歯大・口腔解剖第一 久米川 正 好

〒(0492)85-5511 内線342

日本組織培養学会 第38回研究会申し込み書

演題

演者

所属

(2名以上の場合は講演者に○印をつけて下さい)

スライド	プロジェクター	1台使用	枚
	プロジェクター	2台使用 { 左	枚
		右	枚
	16mm映写機	要	不要

その他の希望事項

連絡先宛名(返信用)

住所 〒

氏名



## 1973年度 ビブリオグラフィー原稿募集

組織培養学会会員各位

1973年度 組織培養学会ビブリオグラフィーの原稿を募集します。  
1973年度の年号のついている論文を、もれなく、下記までお送り下さい。  
ビブリオグラフィーは、組織培養学会研究会発表論文と、誌上発表論文（英文、和文とも）の抄録が中心となります。学会発表は掲載しません。

原稿： 原則として指定用紙1枚以内（止むを得ないときは1枚半以内）  
オフセット印刷にしますので、タイプ原稿がそのまま印刷されます。注意事項をよくお読みの上投稿して下さい。

切： 9月15日

宛先： 〒257

神奈川県秦野市名古木23

日本専売公社生物実験センター 乾 直道

TEL 0463-87-1277